

『実証の考古学―松藤和人先生退職記念論文集―』
(同志社大学考古学シリーズⅫ) 別刷
二〇一八年八月三十一日発行

古墳時代の大型船に帆はあったのか

日 高 慎

古墳時代の大型船に帆はあったのか

日 高 慎

はじめに

古墳時代の埴輪に船がある。現在までのところ四八例が知られている（松阪市教育委員会 二〇〇三、深澤ほか 二〇一三、深澤 二〇一四）。古墳時代前期後半から中期前半の資料が多いものの、後期の資料も知られている。このほか、壁画資料や線刻画などのなかに船の図像がみられる（高木 一九九九、春成 一九九九、深澤 二〇一四ほか）。壁画資料のなかには、後世の戯画も含まれると思われるので注意を要する。具体的な船の構造がわかる埴輪の船に関しては準構造船であり、一体成形船と二体成形船が存在する（一瀬 一九九二・二〇〇八）。それらの埴輪をみると、複数のピボットの存在から多数の漕ぎ手がいたことが想定されるが、果たしてこれらの船に帆があったのかどうか、筆者が常々抱いていた疑問であった。帆による推進力の有無は、船舶のスピードや一日の操行距離に直結する重要な要素であり、古墳時代の大型船に帆があったなら、埴輪を含む各種の図像として表現されてしかるべきであろう。それらを追求することとは、古墳時代の交通手段を考える上で避けて通れないものである。

筆者は、古墳時代の地域間交流のルートについて、かねてより海上・水上交通が極めて重要であったと

主張してきた(日高 二〇〇一・二〇〇二・二〇一四・二〇一五など)。多くの物と人が海上・水上交通により移動していたのだから、当然ながら船舶の構造等について考えなければならない。特に帆船の存否は重要な観点であり、研究史を踏まえて、改めて古墳時代に帆船があったのかどうか考えてみたい。

一 弥生〜古墳時代の帆船に関する研究について

従来、古代の船は丸木舟から準構造船、そして構造船へと複雑かつ高度な技術構造へと変化したと説明されてきた(清水 一九七五、松本 一九八六・一九八九、八賀 二〇〇一など)。弥生から古墳時代にかけては、準構造船の時代として理解され、二体成形船から一体成形船へと変化する(大阪市教育委員会 一九八九、一瀬 一九九二・二〇〇八など)。帆船の起源に関しては、一瀬和夫は埴輪の線刻画や壁画古墳の図像から五世紀代には存在したとしている(一瀬 二〇〇八)。

弥生時代後期の岐阜県岐阜市荒尾南遺跡出土の絵画土器の帆船をめぐって(図1)、佐原眞は一旦帆船として認めていたが、その後評価を保留している(佐原 一九九九・二〇〇二)。宇野隆夫は帆の表現でよいとしており(宇野 二〇〇五)、そうであれば日本列島で最も遡る

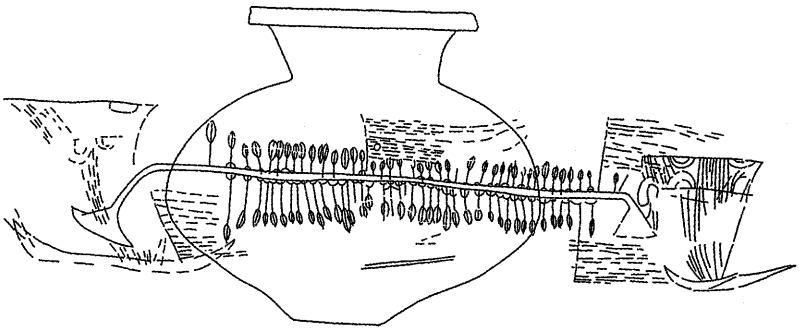


図1 荒尾南遺跡絵画土器の船

古墳時代の大型船に帆はあったのか

帆船資料となる。ただし、重要なのは三艘のなかで真ん中の大型船には八二本の櫂があるものの帆の表現がないことである。大型船の左右にある帆船は表現を見る限り、その相対的な大きさから小型船としか
いえないだろう。

古墳時代の帆船について、古墳壁画や土器・埴輪絵画など、まとまった集成をしたのは上村俊雄である。四世紀末以降に資料があり、「東シナ海に面した九州西海岸地域や日本海側に面した山陰地域にとくに多くみられる」と述べた（上村

一九九二）。追記として一九七一年ころの帆を張った丸木舟（種子島周辺）の写真を提示しており、前述の荒尾南遺跡絵画土器の二隻の帆船と共通するように思える。肥後における装飾古墳を論じた高木正文によれば、五世紀後半のヤンボシ塚古墳の横穴式石室にみられるゴンドラ形の線刻船に帆柱の表現があり、この地域で最古の船の線刻と評価し（高木 一九九九）、六世紀代には桂原一号墳、二号墳

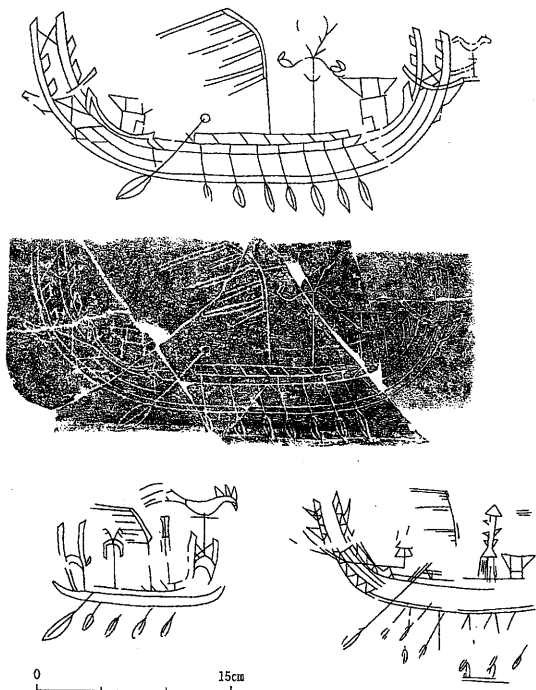


図2 東殿塚古墳線刻埴輪の船

などを始めとして帆船の線刻壁画がみられるとした。

これまで出土した船の埴輪のなかに確実な帆船は皆無であり、左右に多数のピボットを有する手漕ぎ船と考えられるものである。大阪市高廻り二号墳出土埴輪をもとにした「なみはや」、大王のひつぎ実験航海で復元された「海王」なども手漕ぎ船であった(大阪市教育委員会 一九八九、読売新聞ほか編 二〇〇六)。ただし、船の埴輪のなかには船底や床に孔のあるものがあり、そこに木でつくられた帆柱が立てられていた可能性を指摘する意見もあるが(高槻市立今城塚古代歴史館 二〇一四)、奈良県天理市東殿塚古墳の線刻埴輪の船には多数の櫂とともに中央に吹流し状の幡の表現があり(図2)、帆はみられない(天理市教育委員会 二〇〇〇)。漕ぎ手の数については、佐原眞のいうように櫂の数を厳密に受け取らないほうがよいのだろうか(佐原 二〇〇二)、多数の漕ぎ手がいる大型船であることを示しているのだろうか。

今城塚古墳の阿蘇ピンク石

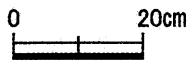
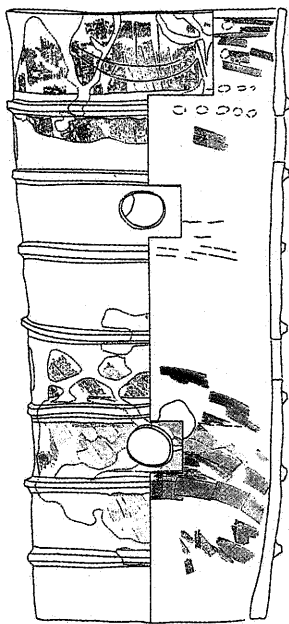


図4 今城塚古墳線刻埴輪の船

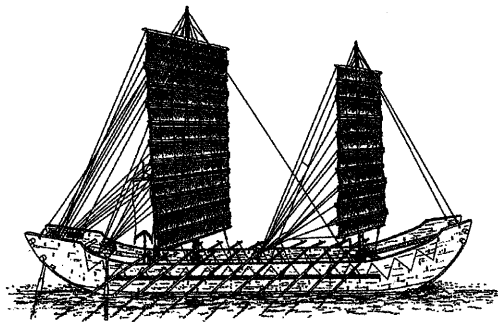


図3 帆船模型「くずは」のイラスト

古墳時代の大型船に帆はあったのか

の石棺輸送に関わり、森田克行は大型船として帆船を想定した(森田 二〇一a、b)。すなわち、平田紘士によって大胆に復元された帆船模型の「くずは」である(図3)。そこには二本の帆柱と左右の舷側に多数の櫂がある。筆者は、この帆船模型の図をみたとき、ある意味衝撃を受けた。これまで、小型の帆船はいざ知らず、古墳時代には大型の帆船はないのだろうと漠然と思っていたからである。森田は今城塚古墳や新池埴輪窯の円筒埴輪に描かれた線刻画について(図4)、碇綱を下した二本帆柱の船であると理解している(森田前掲)。他にも、京都府城陽市久津川車塚古墳などの円筒埴輪にみられる線刻画も三角形の帆を備えた船だとされることが多いが(森田 二〇一a、深澤ほか 二〇一三、高槻市立今城塚古代歴史館 二〇一四)、小型船に帆が表現されたとすべきものだろう。いずれに

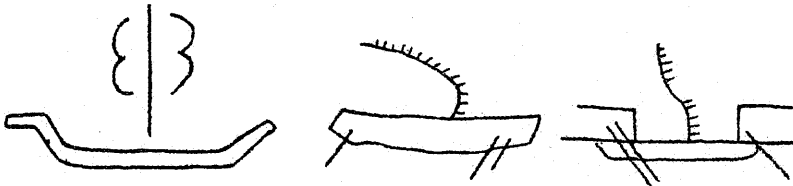


図5 湖南省戦国時代青銅器鐸子に描かれた船

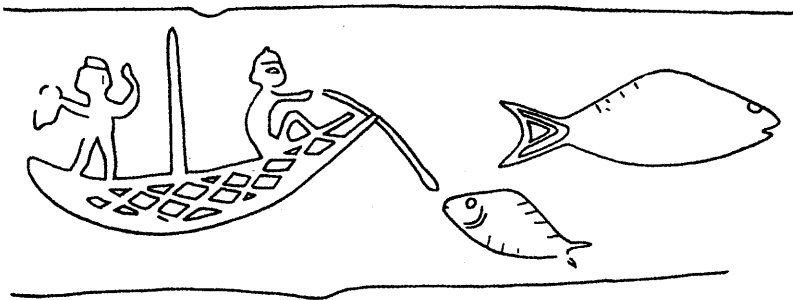


図6 漢代画像磚にみられる船

せよ、森田のいうように古墳時代に大型の帆船が存在したのであれば、これまでのイメージを一新する必要がある。

東アジア地域に目を向けると、中国では春秋戦国時代には帆船があったとされる（林 一九八六・席ほか 二〇一五など）。湖南省出土の戦国時代青銅器罍に描かれた絵は、帆船であると考えられている（図5）。また、漢代の画像磚とされる資料に帆柱のある船が描かれる（図6）。いずれも小型の船と思われる図像であり、この時代に大型の帆船があったのかどうかは分からない。一般的に、秦漢代には大型で帆を持つ船があったと理解されており、三国時代の赤壁の戦いでの船は大型の帆船だったといわれ模型船でもそのように復元される（席ほか 二〇一五など）。海上交通によって様々な文物が行き来したことを考えると、大型の帆船があったことも否定できないが、それを積極的に示す物質資料は知られていない。朝鮮半島では三国時代の新羅土器などに船を象ったものがあり（国立慶州博物館 一九九七・一瀬 二〇〇八）、小型船と大型船との双方が確認されるものの、帆船があったかどうかは分からない。

二 古代の帆船と大型船に関する史料・絵画資料について

ここまで、古墳時代を中心とした帆船についての代表的な見解を示してきたが、問題としては小型船と大型船の操船技術がどのようなものであったかである。帆走があったのであれば、模型船「くずは」にみられるように大型船にも帆が存在したのだろうか。そのことを考えるために、史料のなかの船について、その一部を確認しておこう。遣唐使船は、帆船であったことが幾多の史料にみられるので割愛する。なお文献史料は読み下し文で提示する。

まず、帆船については、以下のようなものがあげられる。

①『日本書紀』神功皇后撰政前紀冬十月

則ち大きな風順に吹きて、帆船波に随う

②『万葉集』第七卷一一八二

海人小舟 帆かも張れると見るまでに 鞆の浦廻に 波立てり見ゆ

③『肥前国風土記』神崎郡

帆船の郷有郡西 同(景行)天皇、巡り行でましし時、諸の氏人等、落挙りて船に乗り、帆を挙げて、三根川の津に参集ひて、天皇に供へ奉りき。因りて帆船の郷といふ。

①と③は船の大きさが分からないが、②は海人小舟とあるから、小さな船ということであろう。

続いて、大船(大型船)については、以下のようなものがあげられる。

④『万葉集』第十五卷三六一一 柿本人麻呂

大船に 真楫しじ貫き海原を 漕ぎ出て渡る月人壮士

⑤『万葉集』第十九卷四二四〇 遣唐使を送るために光明皇后がつくった歌

大船に 真楫しじ貫きこの我子を 唐国へ遣る斎へ神たち

④・⑤ともに「真楫しじ貫き」が「大船」にかかる常套句であり、左右に揃った多数の櫂で漕ぎ出す船を詠んだものだから、弥生時代から古墳時代の土器絵画や埴輪の船にみられる大型船の姿そのものといえるだろう。このことからすれば、大船⇨多数の櫂という構図があると思われるので、大船の表記のない①と③も小型の船なのかもしれない。前述した荒尾南遺跡出土絵画土器三隻の船は、大型船の前後に帆を張

った小型船がある姿として理解すべきものだろう。

⑥『万葉集』第七卷一一七一 羈旅作

大御船 泊ててさもらう 高島の三尾の勝野の 渚し思ほゆ

この歌は風待ちをしている様子として理解されているが、停泊しているのは、風が凧ぐのを待っているのか、それとも帆に受ける良風を待っているのかわからない。『万葉集』には多数の船に関わる歌が載せられており、刳舟から大船までの様々な形態の船を詠っている（辻尾 二〇一五）。このなかで、確実に帆船なのは前述の②のみである。

⑦『宋書倭国伝』順帝昇明二年（四七八）倭王武上表文

道百済をへて船舫を装治す。——中略——毎に稽滞を致し、以て良風を失い、路に進むといえども、あるいは通じあるいはならず。

この一節について、森田克行は良風を失いとあるので帆船による航行を示すと考え（森田 二〇一四）、古墳時代において外洋を航行する帆船の存在を想定したのである。

絵画として最も遡る資料としては、法隆寺献納宝物聖徳太子絵伝の帆船がある（東京国立博物館 二〇一四）。法隆寺献納宝物の聖徳太子絵伝は後世の記録から延久元年（二〇六九）の二月から五月にかけて撰津国の絵師秦到真によって制作されたと考えられている。百済の賢者日羅が難波館に到着したところに帆船が描かれており、二本の帆のうち、船首側は網代風の格子目、船尾側は格子おおよび斜めに交わる線がみえ、いずれも網代帆を表現したものと思われる。また、小野妹子が中国の衡山にいった場面に帆船が描かれており、二本の帆柱のみがあり帆そのものは描かれていない。ちなみに、平安時代末（一二世紀末）こ

ろに描かれた吉備大臣入唐絵巻や鎌倉時代の一二九八年（永仁六）に描かれた鑑真和上東征絵伝などから、遣唐使船は折り畳み可能な竹製などによる網代帆という理解がなされてきた。しかし、東野治之は最澄の『顕戒論』巻上にみられる記述などから布帆の存在を指摘した（東野 二〇一五）。様々な機会に復元されてきた遣唐使船の帆の構造について再考を促すものである。『続日本紀』や円仁の『入唐求法巡礼行記』などには帆船のことが書かれているから、遣唐使船が帆船であったのは間違いない。

三 古墳時代に大型帆船はあったのか

ここまで古代の帆船をめぐって、考古資料と文献・絵画資料からその存在について論及してきた。遣唐使船等に見られる大型の帆船は、果たして古墳時代にまで遡るのだろうか。答えは、未詳であると言わざるを得ず、古墳時代の埴輪の船で積極的に大型の帆船を想定することができないものはない。三重県松阪市宝塚一号墳出土の船について（図7）、船底中央の孔は前後の威杖ともいわれる二つの土製品を挿す孔と同じ構造であり、比較的重量のある棒状の木製品を挿していた可能性が高い。ここに木製の帆柱と有機質の帆が設えてあった可能性もあるが、前述したように奈良県天理市東殿塚古墳の線刻埴輪の船の場合は、中央に吹流し状の幡の表現がある。帆を土製品として表現するのは、造形的に難しいかもしれないが、石見型（威杖）の土製品を製作していることを考えれば無理ではなからう。むしろ、はたためく形の幡を土製品でつくるのは困難だろうから、有機物で作った可能性が高いのではなからうか。現在までのところ、埴輪の船や埴輪線刻の大型船に帆がとりつくものは存在しないことから、古墳時代の大型船は帆がなかったとすべきであらうか。

前述のように、森田克行は古墳時代に大型の帆船があった可能性を説いており、『日本書紀』欽明一五年の百濟救援軍の船団の規模から、それが構造船であった可能性を提示し、飛鳥時代から奈良時代の遣唐使船での一隻に乗り込んだ人員は、一二〇〜一五〇人という大人数となるとした(森田 二〇一四)。古墳時代の木造船について、埴輪や土製品などを含めて考察した一瀬和夫は、大型化と複雑な上部構造をもつ船への変化が四世紀末から五世紀前葉にかけて起っていたとし、六世紀には鉄釘や帆の利用といった変化がみられると説く(一瀬 二〇〇八)。森田や一瀬の説は非常に魅力的であるが、いままし資料の増加を待ちたいと思う。

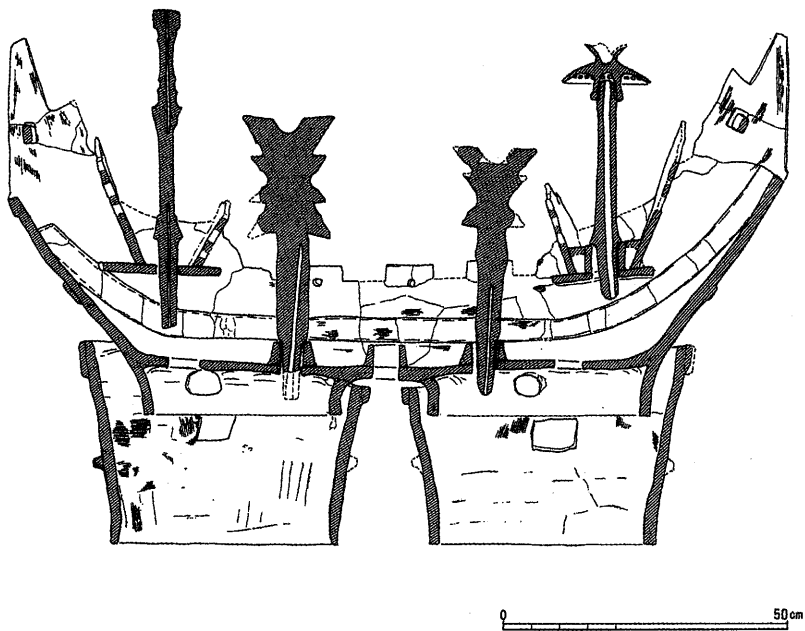


図7 宝塚1号墳の埴輪船断面図

おわりに

海に面した潟・港に近い場所や、海から見たとき目立つ位置に築造した古墳があることは周知の事実である(森 一九八六・二〇〇四、かながわ考古学財団編 二〇一五など)。しかし、古墳時代の海上・水上交通についての研究は、あまり盛んではない。律令国家以降については、多くの研究が蓄積されてきた(千田 一九七四、杉山 一九七八、網野 一九八三、鈴木ほか編 二〇一五など多数)。近世の太平洋・日本海航路に関する研究なども枚挙にいとまがない。古墳時代の大型船に帆があったのかどうか、海上交通の視点とともに新資料の発見に期待したい。

引用文献

- 網野善彦 一九八三「海民の社会と歴史2 霞ヶ浦・北浦」『社会史研究』二二 二七一〜三一〇頁 日本エディタール出版部。
- 一瀬和夫 一九九二「弥生船の復原」『弥生文化博物館研究報告』一 七五〜八二頁。
- 宇野隆夫 二〇〇八「古墳時代における木造船の諸類型」『古代学研究』一八〇 二二五〜二三三頁。
- 大阪市教育委員会 一九八九『よみがえる古代船と五世紀の大坂』。
- かながわ考古学財団編 二〇一五『海浜型前方後円墳の時代』同成社。
- 上村俊雄 一九九一「古墳時代の帆船について」『交流の考古学』四二九〜四五〇頁 肥後考古学会。
- 佐原 眞 一九九九「古墳時代の絵の文法」『国立歴史民俗博物館研究報告』八〇一〜七二頁。
- 佐原 眞 二〇〇一「弥生・古墳時代の船の絵」『考古学研究』四八一〜五二七〜七一頁。

- 清水潤三 一九七五「日本古代の船」『日本古代文化の探究 船』一三～八三頁 社会思想社。
- 杉山 宏 一九七八「日本古代海運史の研究」法政大学出版局。
- 鈴木靖民・川尻秋生・鐘江宏之編 二〇一五『日本古代の運河と水上交通』八木書店。
- 千田 稔 一九七四「埋もれた港」学生社。
- 高木正文 一九九九「肥後における装飾古墳の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』八〇 九七～一五〇頁。
- 高槻市立今城塚古代歴史館 二〇一三「今城塚の大円筒埴輪展」。
- 高槻市立今城塚古代歴史館 二〇一四「古墳時代の船と水運」。
- 辻尾榮市 二〇一五「万葉集の舟・船」『人文論集』三三三 一二三～三〇五頁 大阪府立大学人文学会。
- 天理市教育委員会 二〇〇〇「西殿塚古墳・東殿塚古墳」。
- 東京国立博物館 二〇一四「法隆寺献納宝物特別調査概報三三 聖徳太子絵伝五」。
- 東野治之 二〇一五（一九九四）「遣唐使船の構造と航海術」『史料学探訪』二八～四七頁 岩波書店。
- 八賀 晋 二〇〇一「古代の船と津」『月刊考古学ジャーナル』四七四 二～三頁。
- 林巴奈夫 一九九六（一九七六）『漢代の文物』朋友書店。
- 春成秀爾 一九九九「埴輪の絵」『国立歴史民俗博物館研究報告』八〇 二〇三～二三三頁。
- 日高 慎 二〇〇一「東北北部・北海道地域における古墳時代文化の受容に関する一試考」『海と考古学』四一～二二頁。
- 日高 慎 二〇〇二「水界民と港を統括する首長」『専修考古学』九 三三～四五頁。
- 日高 慎 二〇一四「常陸の前期大型古墳と北方の地域社会」『古墳と続縄文文化』二一一～二三三頁 高志書院。
- 日高 慎 二〇一五「内海世界の海浜型前方後円墳 ①「香取海」沿岸」『海浜型前方後円墳の時代』七六～八九頁 同成社。
- 深澤芳樹 二〇一四「日本列島における原始・古代の船舶関係出土資料一覧」『国際常民文化研究叢書』五（環太平洋海域における伝統的造 船技術の比較研究）一八五～二三三頁。

深澤芳樹ほか 二〇一三『原始・古代の船Ⅰ』立命館大学考古学論集刊行会。

松木 哲 一九八六「船と航海を推定復原する」『日本の古代3 海をこえて交流』一〇五〜一四六頁 中央公論社。

松木 哲 一九八九「丸木舟から構造船へ」『よみがえる古代船と五世紀の大阪』三二〜三三頁 大阪市教育委員会。

松阪市教育委員会 二〇〇三『全国の船形埴輪』。

松阪市教育委員会 二〇〇五『史跡宝塚古墳』。

森 浩一 一九八六「潟と港を発掘する」『日本の古代3 海をこえて交流』三九〜八二頁 中央公論社。

森 浩一 二〇〇四『海から知る考古学入門』角川書店。

森田克行 二〇一〇 a 「三島と古代淀川水運（Ⅰ）」『三島と古代淀川水運Ⅰ』一〜四頁 高槻市立今城塚古代歴史館。

森田克行 二〇一〇 b 「三島と古代淀川水運（Ⅱ）」『三島と古代淀川水運Ⅱ』六〜一四頁 高槻市立今城塚古代歴史館。

森田克行 二〇一四「史・資料にみる古代船」『古墳時代の船と水運』六〜一二頁 高槻市立今城塚古代歴史館。
読売新聞西部本社・大王の棺実験航海実行委員会編 二〇〇六「大王のひつぎ海をゆく 謎に挑んだ古代船」海鳥社。

席竜飛ほか 二〇一五『中国古船図説』武漢理工大学出版社。

林 華東 一九八六「中国風帆探源」『海交史研究』一九八六年第二期 八五〜八八頁。
国立慶州博物館 一九九七『新羅土偶』。

図版出典

図1 佐原 一九九九

図2 天理市教育委員会 二〇〇〇

- 図3 森田 二〇一一b
図4 高槻市立今城塚古代歴史館 二〇二三
図5 林 一九八六
図6 林 一九九六
図7 松阪市教育委員会 二〇〇五

付記

松藤和人先生は、私どもが一九九〇年度に卒業論文を執筆していた時の指導教員でした。その年度は森浩一先生がサバティカルで授業を持たず、卒論ゼミは松藤先生がご担当でした。当時一〇名ほどが考古学で卒業論文に取り組んでいたが、卒論ゼミでは学生が自主的に進行していくことを許され、学生たちがそれぞれ思いつきのよ
うな意見を述べ合ったあと、最後にコメントをしてくださった。何故だったのか忘れたが、先生のご自宅までお邪魔したこともあったようにも思う（内緒の差し替え？）。私どもが学部生であった頃は、松藤先生が主宰していた九州での発掘調査も一段落し、実習室では整理作業を先輩方がおこなっていた。一緒に発掘調査に出掛ける機
会はなかったが、新町の考古学実習室で一番奥に座っている先生という印象が強く残っている。その後、私が縁
あって、東京学芸大学に考古学の教員として赴任した時、同志社大学関係の書籍でないものがあつたら送って
いただけるとのことで、お言葉に甘え図書館および研究室に配架させていただいた。同志社大学をご退職された
ちは、健康にご留意いただき研究の成果を是非後進の私どもにお示しいただきたいと思ひます。